

北アフリカ史の中のベルベル語

—言語的側面からの検証2—

石原忠佳

はじめに

2010年12月、北アフリカのチュニジアで勃発した「ジャスミン革命」は、隣国のリビアやエジプトへも波及し、2012年下半期に今度は東アラブのシリアに飛び火し、世界情勢を左右しかねない状況が続いている。世界の報道機関はアラブ諸国で起こった民主化運動を、一括して「アラブの春」と名付けてきたが、筆者はこうした命名に至ったいきさつを明らかにしたいと考えてきた。ある現象をどのように呼ぶかに関して、言語生活の中で実際の問題となるのは、これまでになかった事物や概念をどう命名するかである。それにはまったく新しい名称を用いる場合もあるが、時には既存の単語の転用もある。バルセロナ自治大学ベルベル研究センター主幹 M.Tilmatine 教授は、北モロッコのスペイン領メリーヤ (Melilla) で2008年に発刊した著書『ベルベル研究に関する分野別参考目録』(Los estudios amaziges: Bibliografía temática, UNED, Melilla, pp.18)において、1980年から90年代にかけて高揚したベルベル人によるアルジェリア中央政府への抗議運動を、すでに「ベルベルの春」(Primavera Amazige)と命名していた。「アラブの春」という用語の由来は、実はここにあるのではないか……。

筆者は前稿(「北アフリカ史の中のベルベル人」『創価人間学論集』5)でモロッコを中心にベルベル人の動向を論じた際、アルジェリア・カビール地

域が現在直面する政情不安にも触れたが（脚注 11, 13）ついにはこの北アフリカの国でも、世界を巻き込む人質事件が起きてしまったことは記憶に新しい。事件の主犯とされるモフタール・ベル・モフタール（Mokhtar Bel Mokhtar）がトゥアレグ民族（Tuareg）の出身であることは、いくつかの海外のマスコミで報道されたが、「トゥアレグ」はサハラ周辺に居住するベルベル系の住民の別称でもある。ムフタールの出生地であるガルダイヤ（Ghardaiya）では今日ベルベル語が話されていて、その系統は、実は本稿で今回取り上げるムサブ系のベルベル語（Mzab）の一方言に分類されている。筆者はこれまで歴史言語学の観点から、北アフリカを眺めてきたが、今回の小論では、ともすれば「アラブ」の名のもとに水面下に押しやられてきたベルベル民族の存在を、社会言語学の側面も念頭においてクローズアップしたい。

ベルベル語使用地域の推移

ベルベル語は今日、厳密にはどの地域で話されているのか。この命題を検証するにあたっては、歴史を追って時代をさかのぼり、とりわけ7世紀の北アフリカに目を向けなければならない。言わずと知れた、アラビア半島から北アフリカに進出したアラブ人の存在である。この時期以前にはベルベル語使用地域は、西は北アフリカ大西洋岸から東はエジプトのシーワ（Siwa）⁽¹⁾ オアシスに至り、さらに南北の広がり、北回帰線（北緯 33 度 26 分 22 秒）から地中海沿岸に至るアフリカ大陸の広大な地域であったとされている。

しかしながら、ベルベル人がこの一帯で果たした役割や、その活動範囲は各国ごとに異なっている。今日ベルベル人の多くが居住するのは、北西アフリカに位置するモロッコとアルジェリアであるが、チュニジア、リビア、エジプト、さらにはモーリタニアにおいても、いくつかのベルベル部族社会が抵抗運動を続けてきた。その一方でマリやニジェールでは、ベルベル語の使用が今日でも健在で、中央政府によってベルベル語は公用語のひとつとして

認知されている。とはいうものの、それぞれの国におけるベルベル語の現状を示した正確な資料はほぼ皆無である。その第一の理由は、言語使用に基盤をおいた人口調査が実施されておらず、唯一手がかりとなるのは、アルジェリアで1967年に行われた国勢調査であろう。北アフリカの国々では往々にして、ベルベル人たちはアラブ系イスラーム住民の中に組み込まれて分類されてきた。それは植民地主義に抵抗すべく「国家の統合」という政策が、これらの国々が従来から優先してきた課題だったからである。こうした諸国では、地域性を考慮したグローカリズムが育つ土壌はなく、「ベルベル」という集団はその統計資料から外されてきたのが今日までの実態である。以下、様々な統計を参考にして、2008年におけるベルベル語使用人口を整理してみたい。

北アフリカ諸国におけるベルベル語の現状

—アルジェリア

前稿でも取り上げたが、アルジェリアにおいてベルベル語使用の中心となるのは北部のカビル系 (Kabyle) ベルベル人の居住する地域である。地理的観点からしてそれほど広がりはないが、人口の集中が顕著で、アルジェリア全ベルベル系住民の3分の2はこの地域に居住している。次に重要なのはシャウヤ系 (Chaouia) ベルベル人で⁽²⁾、アルジェリア北部からチュニジアの国境にまたがるオレス山脈 (Aures) 一帯に100万人が居住している⁽³⁾。これに続くのはムサブ系 (Mzab) のベルベル人集団である⁽⁴⁾。これら3つの部族に加え、さらなる少数派ベルベル部族として、シェヌア系 (Chenoua)⁽⁵⁾ をあげることができる。

さらにアルジェリア南西部のアドラル県 (Adrar) のティミムン (Timimoun) 周辺にも、ベルベル語話者が居住している。この地域のベルベル語はゼナタ系 (Zenata) とされている⁽⁶⁾。またアルジェリアのみならず、モロッコやチュニジアを含めたゼナタ系ベルベル語の話者は、全体で8万人を数える⁽⁷⁾。

—モロッコ

ベルベル語の話者に関していえば、北アフリカ諸国のうちモロッコは、最もその数が多い。モロッコで話されているベルベル語自体は、北部リーフ山脈一帯で話されているターリフィート語《Tarifit》、中アトラス山脈を中心に大アトラスの一部に広がるタマズィフト語《Tamazight》、そしてモロッコ南部大アトラス山脈からアンティアトラス山脈にかけて話されているシェルハ語《Tašelhait》の三つの細分化方言に分類できる。これら3地域のベルベル語話者人口は、モロッコ全人口3000万人の40～60%に相当する1200万～1800万人と推定される。

—トアレグ系

残りのベルベル系住民のグループとして、トアレグ系 (Tuareg) をあげることができる。彼らは通常、自らを「イマジゲン」(imazighen) と呼んでいるが、その発音は imāhagen, imājaghen, 時には imūšagh となる⁽⁸⁾。このうちみずからを imājaghen と称するベルベル人が居住する地域はサヘル (Sahel) とよばれ⁽⁹⁾、ニジュールには50万人、マリには30～40万人が居住するとされている。またアルジェリア最南部のホッガル高原 (Hoggar) や南東部のヌアッジェル高原にあるタッシル・ヌアッジェル (Tassili n' Ajjer) の20万人など、三国にまたがって100万人程度のトアレグ系ベルベル語が話されている。さらにマリ南方のブルキナ・ファッソ (Burkina-Faso) では、3万人ほどのベルベル語話者の存在が確認されている⁽¹⁰⁾。

—リビア

トリポリ県においては、チュニジア国境に近いズワラ (Zwara) やその南方のヤフラン (Yafren), さらに Nefusa 山地でベルベル語話者が確認される。いっぽう東リビアでは、ベンガジ (Benghazi) から300kmほど南下した村落アウジラ (Awjila) でベルベル語が使用されている。この地域の住民は周

辺地域の圧力に対して、従来から抵抗運動を続けてきた。とはいうものの、散在するオアシスが多いことから、ベルベル人居住地域の実態を把握する作業が、最も困難を極めるのがリビアである。これまでの報告によると、リビア総人口610万人のうち、約23%の住民がベルベル語話者であるとされている⁽¹¹⁾。

—チュニジア、モーリタニア、エジプト

チュニジアの首都チュニス (Tunes) やジェルバ島 (Djerba) で5万人ほどがベルベル語を話しているが、チュニジア南部の寒村に居住するガダーミス系 (Ghadames) ベルベル語話者の存在が、近年になって報告されている。この地域はチュニジアのみならず、地域的にはリビアとアルジェリアの三つの国境にまたがっている。また冒頭で述べたエジプトのシーワオアシスに居住するベルベル人や、モーリタニアのゼナガ系ベルベル人 (Zenaga) の話者の数は、全体で5千~1万人と推定されている。これらの国々に居住するベルベル人は、集団として行動を共にすることはなかったため、各国政府によってその言語や文化の存在が今日まで公式に容認されることはなかった。しかしながら近年のインターネットの普及によって、モロッコやアルジェリアに居住する定住型のベルベル住民からは、系統を同じくするベルベル語を話す同胞として認識され、彼らの動向にも関心が寄せられるようになっている。

—カナリア諸島

モロッコ南部とほぼ同一緯度の大西洋に浮かぶカナリア諸島は、今日スペイン領であるが、古来このあたりの島々に居住していたグアンチェ族 (Guanche) は、ベルベル語と同系統の言語を話していたとされる。どのような系統のベルベル語であったのか、今日その検証は困難であるが、カナリア諸島北西部の地名や城壁に記された碑文に、その痕跡が確認されている。カナリア諸島が海洋を隔てて、内陸のベルベル語使用地域とは孤立しているため、ベルベル語は極めて独自の進化を遂げたとの仮説も健在である。目下の

ところ、カナリア諸島に関連する研究は、むしろ考古学、歴史民俗学、あるいは古文書学上の立場から手がけられることが多い⁽¹²⁾。

ベルベル文化復興運動のおこり

歴史的観点からすると、20世紀以前に北アフリカにおいて、ベルベル復興運動が興った記録は残っていない。そのいっぽう、古代の行政制度をものがたる碑文が出土し、そこにはリビア文字と併記されたベルベル文字⁽¹³⁾が刻まれていたことから、中世においてベルベル語が使用されていた事実が明らかとなった。しかしながら、その使用はあくまでも個人のレベルであり、ベルベル語が公用語として機能していたことを物語るものではない。ベルベル独自の文化や言語を取り戻そうとする運動は、かつて表面化したことはなく、たとえそのような動向が見られても、それはイスラーム運動の一環として認識されてきた。

その後北アフリカにおいて、フランスをはじめとする外国勢力による植民地政策が始まった時期に、「アマジグ」(amazigh)という名称を全面的に掲げたベルベル復興運動の兆しが見られた⁽¹⁴⁾。特にフランス語の導入に触発されて、文字文化が北アフリカにもたらされた。そして文字の上に反映されたベルベル文学を通じて、ベルベル人作家が注目されるようになった。やがて、アルジェリアのカビール地域の存在がクローズアップされるようになった時期には、ベルベル文化の社会的、言語的側面についての関心は、大衆の意識を目覚めさせる運動へと発展した。近年アルジェリアにみられるカビール系ベルベル人による中央政府への抗議デモなどは、こうした社会運動の一環と言えよう。

ベルベル人アイデンティティーの確立

‘amazigh’の名のもとに、ベルベル人のアイデンティティーが北アフリカ

で確立されるまでには、以下の歴史的段階を経ている。

— 19世紀以前のカビール系ベルベル人

ベルベル人が地中海に面するカビール地域 (Kabylie) に住みついたのは、今から1万年ほど前にさかのぼるとされる。その後紀元前10世紀には、カルタゴやエジプトとの交易を開始し、その後4世紀にローマ帝国が崩壊すると、ビザンチン帝国の時代には彼らは集団を離れて、散在して居住するようになった。7世紀この地域はアラブ人の支配を受け、ベルベル人の女王カーヒナ (kahina) が抵抗したものの、宗教としてイスラームを受け入れることを余儀なくされた⁽¹⁵⁾。10世紀に興ったファーティマ朝は、カビール地方を北西アフリカの拠点として勢力を拡大した。

— フランス支配下のカビール地域

19世紀に入りアルジェリアはフランスの植民地となるが、この時期にカビール地域のベルベル人は、アルジェリアの他の地域やフランスへ移住を開始した。フランスはその後、カビール地域に居住するベルベル人を、他の地域のベルベル人から孤立させる政策をとり、「イスラーム教徒」の名のもとに、アラブ人の中に一括して組みこんだ。その結果カビール系ベルベル人による抵抗運動が盛んになり、19世紀末には「ベルベルは一つである」というスローガンが、他の地域に先がけてまずカビール地域で高揚した。この時期フランス人有識者たちは、フランス語やアラビア語の活字文化を媒体として、言語や文化の面でベルベル社会が直面している様々な問題を盛んに取り上げた。そして植民地であったカビールの現状を、史料編纂学 (historiography) の観点からフランス語で書きとどめる作業に着手した。またベルベル文化の復興を目的に、ベルベル語を学ぶための講座なども開設され、独自のアイデンティティーを後世に伝えるべく、ベルベル語教育の充実がはかられた。こうしてベルベル文化の遺産は、フランス語とカビール語で書きとどめられることになったが、その表記にはラテン文字が使用され、ベルベル語本来のティフナ

グ文字が併記されることはなかった。

——ベルベリストの危機（1949年）⁽¹⁶⁾

アルジェリアにおいては1945年から50年にかけて、自らのアイデンティティーを確立するための運動が若者たちの間で活発化した。アルジェリア国民解放党（PPA）⁽¹⁷⁾として発足した彼らの活動は、カビール民族運動として軍人たちの間で支持を拡大した。彼らが目指したのは、アルジェリア人としてのアイデンティティーであり、イスラームを母体としたアラブ人のアイデンティティーを、アルジェリアのアイデンティティーとみなすことへの反発である。こうしてアルジェリア国内におけるアラブ対ベルベルの民族対立が浮き彫りになっていく。アルジェリアが一つに統一されることで、フランスの植民地主義に抵抗できると主張した彼らは、「ベルベリスト」(Berbèriste)の名のもとに、カビール地域を中心にその運動を展開した。そのため中央政府から反逆者としての烙印を押され、運動を扇動した何人かのカビール系リーダーが暗殺された。

——1962～1980：アルジェリア独立とその後

1962年アルジェリアは独立を達成したが、ベルベリストへの弾圧はさらに深刻化した。にもかかわらず、アルジェリアの開放を目指したカビール系ベルベル人の社会闘争はその後も続くことになる。その一方、北アフリカにおいてフランスの植民地政策から脱却する唯一の方法は、アラブ民族とイスラーム教を基盤とするものでなければならないとする考え方がアルジェリア全体に普及していた。こうしてアラブ文化を伝えるための手段として、アラビア語教育が大いに促進された。モロッコの首都ラバトでは1956年、アルジェリアの首都アルジェでは1962年、それぞれの国の独立とともにベルベル語教育の廃止が法令化した。ベルベルのアイデンティティーを前面に出すこと即ち、国家を分裂させる行為とみなされたため、'amazigh'を擁護する動きには政治的圧力が加えられた。

こうした状況とは裏腹に、フランスへ追放されたベルベル人の間で国家の抑圧に対する抗議行動が台頭し、1967年にはフランス居住のカビール人政治家の間で「ベルベル文化・研究交流協会」⁽¹⁸⁾が設立された。ベルベルの文化や言語の回復を目的に掲げたこの協会が、フランスで公認されたにもかかわらず、アルジェリアではなお非合法化されたままであった。こうしてベルベル研究に携わる研究者は、GEB⁽¹⁹⁾の名のもとにパリ東部にあるヴァンセンヌ (Vincennes) でその一歩を踏みだし、初のベルベル研究の機関誌を発刊した⁽²⁰⁾。この雑誌に取り上げられたベルベル研究に関するテーマは、具体的にはベルベル民族に関する人類学的考察、文学、歴史、言語など多岐にわたっている。さらには、《言語の基準化にはどのような言語政策が施行されてしかるべきであるのか》を綴った部分もある。フランスへの移民で一同に会したカビール出身ベルベル人の集会は、周囲の同胞を喚起したが、なお一党独裁支配の続くアルジェリア国内では、彼らの活動は非合法であった。しかしながら、アルジェリアで培われたこうした潮流は、隣国のモロッコに波及し、1967年のAMREの設立につながっていった⁽²¹⁾。席上、ベルベル語アルファベットの復活とベルベル文字 (ティフナグ文字) の再築が提唱された。にもかかわらず、こうした動向は学生や知的階級、さらに一部の労働者の間のみにとどまり、大衆全般を巻き込んだ流れには結びつかなかった。

— 1980～1989：抵抗運動の社会的波紋「ベルベル 'amazigh' の春」

ベルベル人による抵抗運動が勢いを増したのは1980年代に入ってからである。「ベルベルの春」とよばれる蜂起の発端は、カビール出身の民族学者 Mouloud Mammeri の演説である。アルジェリア北部のティージ・ウズ大学 (Tizi-Ouzou) へ学生自治会から招かれた彼は、「カビールの古代詩」と題した講演を行った。しかし、ベルベル人の歴史をクローズアップしたその内容が、アルジェリア政府の逆鱗に触れることになった。そしてこの類のテーマを扱った講演会の開催を、今後一切禁じる条例が発令された。こうした政府の対応に抗議して、いくつかの公共機関が異論を唱えたため、その呼びかけ

は大道での抗議デモへと発展した。1962年の独立以来1980年まで、アルジェリア国内でこうした規模の抗議行動が起こったことはただの一度もなかった。当初は学生と警官の間での衝突であったが、次第に学生以外の社会階層を巻き込んだものとなり、ついにはアルジェリア軍の介入へとつながった。その結果カビール全域が軍に包囲された。ベルベル文化復興運動は、当初中央政府への不満として政治的色彩を帯びていたが、次第に「民主化運動の推進による自由と人権の回復」というスローガンに置きかえられていった。この運動は1980年カビール地域にあるヤコーン（Yakouren）という都市で始まり、その要求は「Yakouren 憲章」として採択され文面化された。条項の中にはベルベル人の言語・文化の回復が謳われているため、ヨーロッパに居住するカビール系ベルベル人の間で同胞意識を目覚めさせる結果となった。さらに隣国モロッコのベルベル人の間にもこうした意識が芽生え、‘amazigh’ と題した同人雑誌の発刊へとつながった。しかしながらモロッコでも事情は同じで、当時の国王ハッサン2世⁽²²⁾によってその出版は禁止された。

—— 1989～1990：世界へ発信された ‘amazigh’ の存在

1980年代は北アフリカ一帯で民主化運動が促進された変動の時代であった。そして1990年から91年にかけては北アフリカのみならず、ベルリンの壁やソビエト連邦の崩壊など、国際政治でも様々な社会変革をもたらされた時期である。こうした動向はアルジェリア北部においても、開かれた政治制度を求める社会運動を巻き起こした。ベルベル系住民独自の政治政党であるRCD⁽²³⁾が結成され、アルジェリアにおける最初の野党となった。さらにはFFS⁽²⁴⁾とよばれるベルベル系社会主義左派政党も設立され、この二つの政党がカビール系ベルベル人の主張を代弁すべく、それぞれの活動を展開した。その後カビール地域には、多くのベルベル文化同好会が発足し、それまでは極秘に行われていた活動が、公に認識されるようになった。1991年ベルベル語をアルジェリアの公用語の一つとして認定しようとする運動が起こり、ティージ・ウズ大学のほかにベジャイア（Bejaia）⁽²⁵⁾大学でもベルベル言語

文化学科の設立となった。さらに1995年に入り、一年間のゼネストによって、カビール地域の学校が閉鎖を余儀なくされた。こうした事態に対応するため、当時のアルジェリア大統領ゼルール(Liamine Zéroual)は警察署管轄下に「ベルベル問題対策本部」⁽²⁶⁾の設置を宣言した。

アルジェリア政府がとった一連の処置は、ヨーロッパ在住のベルベル系住民の間で同胞意識の高揚に拍車をかける結果となった。異なる地域に居住するベルベル系住民はインターネットなどのメディアを通じて連絡を取り合い、「ベルベル世界会議」の開催を促した。国連で労働差別を撤廃するための民族族会議が開催されると、世界に分散したベルベル人が一つになることへの呼びかけが始まった。こうして国外で労働に従事する者も、母国にとどまっている者も、ベルベル人として一つになったことで、世界の関心が「ベルベル」という民族の存在に向けられた。

ベルベル言語・文化研究：発祥とその推移

「ベルベル」に関連する諸研究が本格的に開始されたのは、ヨーロッパによって北アフリカが植民地支配下に置かれていた時期である。政治的あるいは軍事的基盤を築く目的で、フランスをはじめとしたヨーロッパ諸国はこの地域の言語や文化への理解に関心事としていたが、現地には当時ベルベル語を教える教育施設は皆無であった。ベルベル語で書かれた新聞などもなく、さらには各国政府によって公式な場でのベルベル語の使用が禁止されていたことなどが、この地域への接近をさらに困難なものにしていたと言える。いっぽうこうした政治的意図とは裏腹に、学問的関心からヨーロッパ在住の研究者が、調査目的で北アフリカの農村に多く流入したのもこの時代である⁽²⁷⁾。当初の政治的意図が、この地域に対する言語的関心を促進する結果になったことは興味深い。

ベルベル研究への取り組みは北アフリカの国々の独立後も取り立てて関心を引かない分野のままであった。各国政府はベルベル語研究への関心を植民地主義がもたらした好ましくない社会現象とみなし、こうしたテーマを扱うことは大学レベルにおいても依然として禁止されていた。前稿でも指摘したように、この分野の研究にまず着手したのはヨーロッパ（フランス）の INALCO⁽²⁸⁾ である。

—— 1970～1980年代：国際社会におけるベルベル言語・文化研究の充実期
前節ではこの時期におけるベルベル文化復興運動の変遷を、アルジェリアとモロッコを例にとって取り上げたが、この段階に至って北アフリカ諸国でも「ベルベル研究」にまつわる諸テーマへの関心が高まりをみせた。

—— 1990年以降：言語的側面からみたベルベル語の位置づけ

ベルベル文化への関心はその後多くの国々で高まり、言語学的にベルベル語の系統を探る研究に多くの研究者が携わるようになった。こうした動向にあいまって、北アフリカの住民たちの間でも、自らの言語や文化を再認識する必要性がさかんに論じられ、各地で教育施設の充実と近代化が叫ばれるようになった。この時代は奇しくもソシュールが提唱した「構造主義」(Structuralisme) やチョムスキーの「生成文法」(Generativismo) への関心が一世を風靡した時期である。こうした流れを反映してか、いくつかの国ではアフロ・アジア語（セム・ハム語）研究の一環として、ベルベル語を位置づける研究が提唱されたが、ベルベル語そのものに関する研究はフランス以外の国では省みられることが少なかった。この頃バリの INALCO では文献学としてのベルベル語研究の基盤が確立された⁽²⁹⁾。同時に前節で引き合いに出したアルジェリアのカビール地域を代表する Tizi-Ouzu 大学や Bugia 大学でもベルベル語文献学の講座が開設された。ベルベル語をめぐるこうした学術的方向性は南スペインへと波及し、スペイン国立カディス大学哲文学部アラブ・イスラーム研究センターで引き継がれることになった。1996年以降ベ

ルベル語の講座が新たに必修科目に認定された⁽³⁰⁾。

スペインにおけるベルベル研究のあゆみ

—ベルベル語研究の先駆者たち

20世紀の初頭モロッコ北部を植民地としていたスペインにとって、その商業的基盤を拡大することが急務であった。現地の住民と緊密な関係を築き、商業製品の導入などさらなる影響力の行使を目的に、当時アラビア語口語や土着語への関心が大いに高まってきた。

既に1872年モロッコのタンジェール (Tanger) で、宣教師 J. María Lerchundi が *Rudimentos del árabe Vulgar que se habla en el Imperio de Marruecos* (『モロッコ王国で話されている口語アラビア語の初歩』) を発刊していたことを幸いに、北アフリカの言語の把握が始まった。かなり後の時代になって発刊された Ginés Peregrín: *Rudimentos de berber rifeño* (『リーフ語の初歩』) Tetuán, 1944. によると、Lerchundi の著は、当時彼が現地人から聞いたそのままの口語アラビア語やリーフ語を取りあげているとの報告がある。Lerchundi の著に大いに啓発され、20世紀になって、Pedro Sarrionaindia: *Gramática de la lengua rifeña* (『リーフ語文法』) Tanger, 1905. が世に出た。これはベルベル語を取りあげたスペイン初の文法書である。音韻論に始まり形態論、統語論に至るまでのリーフ語の詳細を述べたこの著は、リーフ語が他のベルベル語とは異なり、この地域が言語上の飛び地 (enclave) であることを指摘している。この著に関連して、Esteban Ibañez: *Diccionario español-rifeño* (『スペイン語—リーフ語辞典』) Madrid, 1944; 同じく、*Diccionario rifeño-español* (『リーフ語—スペイン語辞典』) Madrid, 1949 が引き続き発刊され、スペインにおけるベルベル語研究が本格的に開始されることになる。彼も Sarrionaindia 同様に、モロッコにおけるスペイン・イエズス会の宣教師として長らくタンジェールに滞在し、かなりの年月をかけてこの二つの辞典を完成させた。とりわけ前者1944年のものは、今日高い評価を受けている。

この辞典に掲載されている約三万語のスペイン語の語彙は極めて日常的で、かつ洗練されており、経済、文化、宗教など幅広い分野にまでおよんでいる。

さらにフランシスコ会の宣教師で *Los berberés marroquíes* (『モロッコのベルベル族』) Tetuan, 1952. を書いた Angel Koller も、ベルベル語の語彙研究で知られる先駆者の一人である。旧フランス保護領、首都の大聖堂教区の司祭を勤めるかたわら、メクネス (Mequinez)、カサブランカ (Casablanca) 方面の伝道に赴き、アラビア語モロッコ口語を習得した彼は今日、ベルベル族の社会的あるいは宗教学的の研究での第一人者といわれている。A.Tovar: *Expedición al Rif ; Su importancia, necesidad y conveniencia* (『リーフへの遠征隊：その重要性、必要性、適合性』) Madrid, 1958, p.94 は、Esteban Ibañez の 1944 年の辞典に言及し、彼の語彙研究の業績を高く評価している。また歴史学者 J. Rivera: *Influencia berberiscas en el Reino de Valencia* (『バレンシア王国におけるベルベルの痕跡』) Madrid, 1963, p.169. も Ibañez の著書が、言語のみに限らず、多くの読者を想定してベルベルの習慣、思想、文化、宗教の側面にまで立ち入って分析を試みている点に触れ、彼がベルベルの全体像をスペイン社会に広く紹介した功績を讃えている。

またこの著書に先だつこと 20 年、Isidro de las Cagigas: *Influencias berberiscas en el Reino de Valencia*, Madrid, 1946, pp. 113-31 には、スペインのかつてのバレンシア王国に、ベルベル人がもたらした様々な側面での影響が詳細に記されている。その後 J. Olivar Asín: *En torno a los orígenes de Castilla* (『カスティリアの起源について』) Madrid, 1950, p. 319 はスペイン各地に残るベルベル起源の名称を、地名学の立場から分析した。実はこの著の用語研究に基づいて、前出の A. Koller (1952) は完成したとされている。

—近代スペインにおけるベルベル語研究の動向

近代スペインにおけるベルベル言語・文化研究は 1995 年以降新たな時代をむかえた。

同年 1 月バルセロナ自治大学の出版部は、『ターリフィート語文法』La

llengua Rifenya: Tutlayt tarifit, Servicio de Publicaciones de la Universidad Autònoma de Barcelona と題したベルベル語文法書の発刊に踏みきった。それまで本格的な文法書などスペインでは出版されていなかったが、そのうちベルベル語の一方言であるターリフィート語文法の発刊に、カタルーニャ地方の大学がカタルーニャ語で初めて着手したわけである。カタルーニャ語によるベルベル語文法の発刊に遅れること3年、ようやく1998年になってスペイン語版『ベルベル語文法』(La lengua Rifeña: Tutlayt tarifit) が、なんと北アフリカの地メリーリャ (Melilla) で世に出た⁽³¹⁾。M. Tilmatine 教授は2006年、バルセローナにおいて共著で『大学生のためのベルベル語—カタルーニャ語会話の手引き』(Tamazight-Takatalant: Amalal Usiwel Asdawan) を発刊した。258ページからなるこの著は単なる日常会話集ではなく、巻末には豊富な語彙集も載せている。さらにこの著書の表紙には、古代にベルベル人が使用していた「ティフナグ文字」でタイトルが併記されている。

あとがき

「言語的側面からの検証Ⅱ」として、前項に引き続きベルベル語の使用地域、ベルベル文化運動、ベルベル研究の推移などその概観を取り上げた。今回は当初、テーマをベルベル語の言語学的側面に絞って論を進める予定であったが、国際共同プロジェクトにおけるフィールドワークの期間と重なったため、思うように本稿の執筆がはかどらず、当面予定していた「ベルベル文字 (ティフナグ文字)」についての項目は割愛せざるを得ない状況となった。目下プロジェクトの研究報告書を作成しているのは、奇しくも J. María Lerchundi (1836-1896) の功績をたたえて建造された在モロッコ・レルチュンディ図書館 (Centro Cultural Padre Lerchundi, Biblioteca Universitaria) である。1856年にスペインのクエンカ (Cuenca) でフランシスコ会の宣教師となった Lerchundi は、1986年にはモロッコ北部のテトゥアン (Tetuán) とタンジェール (Tanger) に伝道者として赴き、さらには言語学者としても多くの著作を

発刊、1896年に60歳で生涯を閉じている。筆者は今回の国際共同プロジェクト期間中⁽³²⁾、Francisco Jimenez 図書館長の好意により、19世紀に発刊されたベルベル語関連の原本や蔵書を、このように由緒あるレルチュンディ図書館資料室で閲覧することができた。こうした貴重な機会を提供して下さった館長に、甚大な感謝の意を表したい。

[註]

- 1) Alphonse: Leguil 『シーワのベルベル語に関する一考察』“Notes sur le parler berbère de Siwa”, *Bulletin des études africaines de l'INALCO*, 6, 11-12 (1986), pp.5-42, 97-124. によれば、エジプトのシーワは古代エジプトの主神であったアモン神の神殿があった場所とされている。現在シーアオアシスには、6000人程度のベルベル語話者がいるとの報告がある。
- 2) 前稿でも取り上げたが、この地域のベルベル語は《Tašawit》と呼ばれるベルベル語の細分化方言で、話者人口17～18万が想定される。
- 3) Aures 山地は確かにアトラス山脈の継続であるが、モロッコ国内のアトラス山脈ほどの標高には達せず、最も高いシェリア山 (Djebel Chelia) で2326 mとなっている。この地域の住民は本来の遊牧民生活ではなく、むしろ季節ごとの移動牧畜で生活を営んでいる。このAures地方が歴史的観点から注目されるのは、バンダル (Vandal)、ビザンチン、アラブ、さらには近代フランスの侵入に、ゆるぎない抵抗を示したベルベル人の拠点だったからである。
- 4) 彼らの話すベルベル語はタムザビト語《Tamzabit》とよばれ、モロッコのタマズィフト語《Tamazight》の細分化方言に数えられ、話者人口は10万前後とされる。
- 5) 《Taišnouit》と呼ばれるシェヌア系ベルベル語の話者数は、《Tamzabit》よりさらに少ない8万人前後とされる。首都アルジェ (Argel) 西部のTipasa 県沿岸地域には、シェヌア系ベルベル語を話す4764人が居住しているとの興味深い報告がある。World Christian Database (2000), BRILL
- 6) ゼナタ系ベルベル語は《Tazenatit》とよばれ、その言語的特質に関しては以下の資料が詳しい：
“Le dernier document en berbère de Tamentit”, *Awal* 1 (1985)
René Basset, “Notes de lexicographie berbère”, *Journal Asiatique*, vol. X, 1887: p. 390.
Maarten Kossmann, “Cinq notes de linguistique historique berbère”, *Etudes et Documents Berbères*, 17, 1999: pp. 131-152
- 7) アルジェリア北部のオラン県 (Oran) や南東部ワルグラ県 (Ouargla) にあるオアシスの町トゥググルト (Touggourt) でも、1万人ほどのベルベル語話者が確認され

ている。

- 8) ベルベル語本来の /z/ の音がアルジェリア南部では /h/, マリ南部やニジェールでは /j/, 『さらにマリ北部では /s/ となる事実については, 前稿 (『創価人間学論集』 5号 p.27) でも取り上げた。
- 9) “Sahel” は Littral 「沿岸」を意味するアラビア語で, 従来はアフリカ大陸の西は大西洋岸から東はエリトリア (Eritrea) までの 400 万平方キロメートルを想定している。そして北はサハラ砂漠, 南はサバンナに接する亜熱帯地域である。
- 10) H.Claudot-Hawad (dir.), 《*Touareg, Exil et résistance*》, Revue de l'Occident (puis du monde) musulman et de la Méditerranée, 57, Aix-en-Provence (1990), p.9.
- 11) Charles Pellat: 《berbères》, *Encyclopaedia of Islam*. (1960), pp. 1173-1187. による。しかしながら, 2011 年のカダフィー政権崩壊後, リビア国内のベルベル人の居住地がどのように変遷したかに関しては, 当分の間フィールド調査は困難である。
- 12) J. Onrubia-Pintado: 《Canaries》, *Encyclopédie Berbère* XI, Aix-en-Provence
—— 《Iles Canarie (préhistoire)》, *Encyclopédie Berbère* 6 XI (1985)
石原忠佳 「著者の周辺—ベルベル人とベルベル語文法」『イスパニア図書』10号, 行路社 (2007), p.254-255.
- 13) ベルベル文字は通常「ティフナグ文字」とも呼ばれ, 様々な地域のベルベル語を表記するために従来使われていたアルファベットである。別名「リビア・ヌミディア語アルファベット」とも称されるこの文字は, 紀元前3世紀から紀元後3世紀頃まで, 北アフリカで広く使われていて, フェニキア文字がその起源とされている。
- 14) “Berbère” という用語が, 近代ヨーロッパでは “amazigh” に取って代わられたいきさつについては前稿『創価人間学論集』5 p.28) で取り上げた。
- 15) カーヒナ (kahina) というのはアラブ人による名称で, ベルベル人の間で彼女は “Dihya” と呼ばれていたいきさつについては, 前稿『創価人間学論集』5 p.26) でのべた。
- 16) 「ベルベリストの危機」はフランス語で 《Crise Berbère》とよばれた。
- 17) Parti du Peuple Algérien
- 18) Académie Berbère d' échange et de recherches culturelles : 1969年にこの協会はベルベル語による “Agraw Imazighen” という名称に変更されている。
- 19) Groupe d'Études Berbères de Vincennes
- 20) Bulletin d'Études Berbères
- 21) モロッコベルベル研究文化交流協会 (Assotiation marocaine de Recherche et d'Échange Culturel)
- 22) ハッサン II 世は 1961 年から 1999 年の死去まで, 国王としてモロッコを統治した。その後は子息のモハメッド VI 世が即位し現在に至っている。
- 23) 「文化・民主連合」Rassemblement pour la Culture et la Démocratie
- 24) 「社会主義勢力戦線」Font des forces socialistes

- 25) 'bujaja' は正式には 'bujaja' と表記される。この地名はアラビア語では 'bijāya' フランス語では 'bougie' さらにベルベル語地名では 'vgaïet' となっている。その他 'bujia' 'bujaja' などの表記もある。
- 26) Haut Commissariat à l'Amazighité
- 27) 当時ベルベル研究が直面していた状況に関しては、その後親子2代にわたってベルベル研究に従事した René Basset (1855-1924) と André Basset (1895-1956) の二人がこの分野での先駆者として知られている。
- 28) INALCO の試みに関しては、前稿 (『創価人間学論集』5号, pp.23-24) で取り上げた。
- 29) INALCO では Lionel Galand がベルベル研究の先駆者であり、とりわけ研究所の初代所長に任じた Salem Chaker によるカビール地域のベルベル語研究への貢献は今日でも高い評価を受けている。
- 30) 本稿冒頭で紹介した M.Tilmatine 教授は1996年以来、カディス大学でベルベル語の講座を担当し今日に至っている。筆者は2009年に実施した在外研究以来、国際共同プロジェクトの実施にあたっては、教授に情報を提供していただいた。
- 31) このスペイン語版『ベルベル語文法』に先がけて、カタルーニャ語版がいち早く出版された理由は、モロッコ国内における出稼ぎ労働者の移民問題と深いかわりをもっている。それはリーフ地域出身のベルベル系移民がまずもって目指したのは、スペインでもとりわけ就職率のよいカタルーニャ自治州であったからである。1990年代に入り、ベルベル語系住民を受け入れてきたカタルーニャ政府は、移民労働者にカタルーニャ語を学習させる目的で、ベルベル語・カタルーニャ語の日常会話集を出版する必要性を認識するようになったからである。
- 32) 平和中島財団国際学術研究助成 (平成24～25年) 「北アフリカ先住民ベルベル人のルーツを求めて」

《参考文献》

- Aghali-Zakara, Mohamed : 《Graphèmes berbères et dilemme de diffusion: Interaction des alphabets latin, ajami et tifinagh》 *Etudes et Documents Berbères* 11, 107-121. (1994)
- Aghali-Zakara, Mohamed; and Drouin, Jeanine: 《Recherches sur les Tifinaghs-Éléments graphiques et sociolinguistiques》 *Comptes-rendus du Groupe Linguistique des Etudes Chamito-Sémitiques* (GLECS) (1977)
- Ameer, Meftaha : 《Diversité des transcriptions : pour une notation usuelle et normalisée de la langue berbère》 *Etudes et Documents Berbères* 11, 25-28. (1994)
- Boukous, Ahmed : 《Situation sociolinguistique de l'Amazigh》 *International Journal of the Sociology of Language* 123, 41-60. (1997)

- ——— : *Sociolinguistique marocaine, Plurilinguismes*, Sorbonne, Paris, (1999)
- ——— : *Phonologie de l'amazigh*, Institut de Recherche et Coordination Acoustique/Musique, (2009)
- Chaker, Salem : *Revue de l'occident musulman et de la mediterranee*, Compte rendu de : Petites Soeurs de Jésus, Contes Touaregs de l'Air, Paris, (1974)
- ——— : Pour une notation usuelle à base Tifinagh. *Etudes et Documents Berbères* 11, 31-42. (1994)
- ——— : 《Propositions pour la notation usuelle à base latine du berbère》 *Etudes et Documents Berbères* 14, 239-253. (1996)
- ——— : La Kabylie: un processus de développement linguistique autonome. *International Journal of the Sociology of Language* 123, 81-99. (1997)
- Durand, O. : Promotion du berbère : problèmes de standardisation et d'orthographe. Expériences européennes. *Etudes et Documents Berbères* 11, 7-11. (1994)
- Maarten, Kossmann : 《Cinq notes de linguistique historique berbère》 *Etudes et Documents Berbères*, 17, (1999)
- Maarten, Kossmann: « Is there a Songhay substratum in Gourara Berber? », Maarten Kossmann, Rainer Vossen, Dymitr Ibrizimow (eds.) *Nouvelles études berbères: Le verbe et autres articles*, Rüdiger Köppe: Köln, pp.51-66. (2004)
- Michael, O'Connor: 《The Berber scripts》 *The World's Writing Systems*, New York: Oxford University Press. (1996)
- Penchoen, Thomas G.: *Tamazight of the Ayt Ndhir*. Los Angeles: Undena Publications. (1973)
- René Basset : 《Notes de lexicographie berbère》 *Journal Asiatique*, ser. 8, vol. X, (1887)
- Savage, Andrew: 《Writing Tuareg – the three script options》 *International Journal of the Sociology of Language* 192: 5-14. (2008)
- Anonymous 《Le dernier document en berbère de Tamentit》. *Awal* 1. (1985)

石原忠佳 『モロッコ・アラビア語』, 大学書林, (2000)

———, 「アンダルシア史の中のベルベル人」 『アンダルシアの風景』 丸善ブックス, pp.235-243. (2005)

———, 『ベルベル人とベルベル語文法』 新風舎, (2006)

———, 「多言語国家としてのスペインとモロッコ」 『世界の言語政策 2』 くろしお出版, pp.201-234 (2007)

———, 「リレー連載:私のフィールドワークから (31) —ベルベル語」 『言語』 大修館書店, (2009)

———, 「中東の言語政策」 『世界の言語政策 3』 くろしお出版, pp.119-137. (2010)

(60)

- , 「イスラム」『スペイン文化事典』丸善, pp.620-21. (2011)
- , 「スペイン領モロッコ」『スペイン文化事典』丸善, pp.34-35. (2011)
- , 「北アフリカ史の中のベルベル人 I」『創価大学人間論集』第 5 号, pp.21-37. (2012)
- , 「手を結んだカタルーニヤ語とベルベル語」『言語と貧困』明石書店, pp.55-57. (2012)